終助詞「ゴド」

玉懸　元

はじめに

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、終助詞「ゴド」に関する調査を行なった。本稿は、その調査結果を報告し、考察を行なうものである。

1　調査の目的と調査文の設定

気仙沼市方言には、「ゴド」という終助詞がある（異形態として「ゴダ」があるが、ここでは、気仙沼市方言において多く観察される「ゴド」を代表形とする）。これは、ものごとのありさまに驚いたり、感動したりした際に用いられるもので、名付ければ、感動の終助詞とでも呼ぶことができるだろう。

この終助詞は、動詞・形容詞・形容動詞の終止形や名詞＋ダの形（要するに、他の終助詞を伴わない言い切りの形）から接続し、たとえば、次のように用いられる（もっとも、それぞれの用いられやすさには差がある。後述）。

（1）キレーナ川(カワ)ダゴドー

（2）キレーダゴドー

（3）キレーナ川(カワ)カ゜アルゴドー

ただし、形容動詞から接続する際には、次のように連体形から接続する場合もしばしば見受けられる。

（4）キレーナゴドー

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査で、筆者は、この「ゴド」について調査を行なった。特に興味を惹かれたのは、次のような点である。

ⓐ「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられているか。

ⓑ「ゴド」は、名詞「ゴド」（事）を出自とするものと考えられる。とすると、連体形から接続する形が本来であって、それが終助詞化するにしたがって終止形から接続するようになったのではないか。このことが世代差を観察することによって確認できないか。

ⓒ一口に感動表現と言っても、「きれいな川！（連体修飾を伴う名詞文）」「きれい！（形容動詞一語文）」「川がきれい！（形容動詞述語文）」「きれいな川がある！（動詞述語文）」など、その形式は幅広い。「ゴド」は、どのような形式の文とよくなじむのか。

以上の関心に応じて、次の［1］［2］を調査文として取り上げ、それぞれにおける「ゴド」の使用の適否を尋ねることにした。

［1］①この部屋、ずいぶん静かなゴドー

②この部屋、ずいぶん静かだゴドー

［2］①きれいな川だゴドー

②きれいだゴドー

③川がきれいだゴドー

④きれいな川があるゴドー

調査文［1］は上記ⓑ、［2］はⓒの関心に応じて、定めたものである。上記ⓐの関心については、［1］［2］による調査を通して、明らかになるものと考えた。

2　話者

筆者の調査（面接調査）には、気仙沼市出身在住の 70 名の方から協力を得た。その内訳は、次の通りである。

・高年層（60 歳以上）　……22 名（男性 12 名、女性 10 名）

・中年層（40・50 歳代）　……15 名（男性 7 名、女性 8 名）

・若年層（20・30 歳代）　……13 名（男性 5 名、女性 8 名）

・少年層（高校生）　……20 名（男性 10 名、女性 10 名）

3　調査結果と考察

3.1　「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられるか

調査文［1］［2］のいずれにおいても「ゴド」を使用しないと回答した話者（すなわち、「ゴド」を使用しないと考えられる話者）は、中年層男性 1 名、若年層男性 1 名、少年層男女各 1 名のみであった。

共通語には「こと」という類似の終助詞があり、「ゴド」と同じく感動表現に用いられる（「きれいだこと」）。けれども、共通語の「こと」は、一定以上の年齢の女性による使用を想起させる（事実としてそうであるかは、別に調査が必要であるが）。それに対して、気仙沼市方言の「ゴド」は、そうした偏りを持たず、老若男女の別なく用いられるものであることが分かる。

なお、以下では、「ゴド」の不使用者である 4 名の話者を措いて、調査結果の報告と考察を進めることにする。

3.2　「ゴド」は、連体形と接続するか、終止形と接続するか

ここでは、調査文［1］による調査の結果について述べる。この調査文は、「ゴド」が連体形から接続するか、終止形から接続するかを明らかにしようとするものである。次の［1］①②のように「ゴド」を使用するか否かを尋ねた。

［1］①この部屋、ずいぶん静かなゴドー（連体形接続）

②この部屋、ずいぶん静かだゴドー（終止形接続）

調査の結果は、次の通りである。

（5）調査文［1］による調査の結果

・連体形接続のみを使用する話者 …… 6名 (9.1%)

・連体形接続と終止形接続を併用する話者 …… 18名 (27.3%)

・終止形接続のみを使用する話者 …… 42名 (63.6%)

終止形接続を使用する話者が多数ではあるものの、連体形接続を使用する話者も全体の3～4割（24名）に上り、決して少数ではない。

この点については、世代差を見ることが興味深い。各年層における連体形接続の使用者数は、次の通りである。

（6）連体形接続の世代別使用者数

・高年層 …… 13名 (高年層話者の 59.1%)

・中年層 …… 6名 (中年層話者の 42.9%)

・若年層 …… 2名 (若年層話者の 16.7%)

・少年層 …… 3名 (少年層話者の 16.7%)

このように、連体形接続を使用する話者は、主として高年層（～中年層）であって、世代が若くなるにしたがって使用されなくなっていることが見てとれる。

さらに、話者それぞれの回答を見てみる。次の図1～4は、高年層・中年層・若年層・少年層の話者を生年順（生年は 1900 年代の下二桁を示した）に並べ、話者それぞれが連体形接続／終止形接続を使うか否かを、「●（使う）」「×（使わない）」の記号で示したものである。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
生　年	26	27	28	30	30	31	33	35	38	38	38	39	40	40	41	42	42	42	43	43	43	45
性　別	男	女	男	男	女	男	男	男	女	女	男	女	男	男	女	女	女	女	男	男	男	女
連体形接続	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	×	●	×	●	×	×	●	×	×	×	●	●
終止形接続	×	●	●	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図1　連体形接続か、終止形接続か（高年層話者それぞれの回答）

No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
生　年	48	48	49	50	50	50	50	51	53	55	56	56	56	64
性　別	男	男	女	女	女	女	女	女	男	男	男	男	女	女
連体形接続	×	×	●	●	×	×	×	●	●	×	×	●	●	×
終止形接続	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図2　連体形接続か、終止形接続か（中年層話者それぞれの回答）

No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
生　年	67	69	72	76	76	79	80	82	83	84	84	86
性　別	女	男	女	女	女	女	男	男	女	女	女	男
連体形接続	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図3　連体形接続か、終止形接続か（若年層話者それぞれの回答）

No.	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
生　年	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	90	90
性　別	女	男	男	女	女	女	女	男	男	女	男	男	女	男	男	男	女	女
連体形接続	×	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×
終止形接続	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	●	●	●

図４　連体形接続か、終止形接続か（少年層話者それぞれの回答）

このようにして見ると、1940 年以前に生まれた話者（図中の No.1～14。ここでは「最高年層」と呼ぶことにする）において、連体形接続を使用する話者がまとまって認められることが分かる。

ところで、一般に、言語形式Ａが新しい言語形式Ｂに置き換わるまでには、次のようなプロセスが踏まれる。

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
A	A	A	A	
	B	B	B	B

図５　言語形式が置き換わるプロセス

左端の [1]は、新しい言語形式Ｂがまだ現れず、Ａのみが使用されている段階である。次の[2]は、新しくＢが現れ、それによってＡの勢力がやや弱まる段階である。続く[3]は、Ｂが勢力を伸ばし、Ａの勢力がいっそう弱まり、両者が拮抗する段階である。[4]の段階になると、Ａの勢力がすっかり弱まり、Ｂが主たる言語形式となる。最後の[5]の段階では、Ａが滅び、Ｂのみが使用されるようになり、置き換えが完了する。

さて、あらためて図１を見ると、最高年層である話者（No.1～14）においては、連体形接続と終止形接続とが凡そ同等の勢力を持っていることが見てとれる。すなわち、この世代は、「ゴド」の接続の仕方が連体形接続（もともとの接続の仕方）から終止形接続（新しい接続の仕方）へと置き換わっていく過程における、ちょうど中間的な段階（図５における[3]の段階）にある世代と考えられる。高年層（No.15～22）および中年層の話者では、連体形接続も見受けられるけれども、終止形接続が主流となっている。この世代は、図５における[4]の段階にある世代である。そして、若年層・少年層と世代が若くなると、連体形接続を使用する話者は、ほとんど見られなくなる。この世代は、終止形接続への置き換えが完了しようとする段階（図５における[5]に近い段階）にある世代として位置づけられるだろう。以上のことを図示すると、次のようになる。

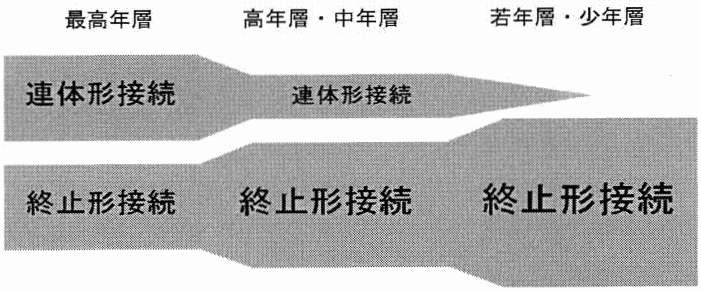

図６　各世代における、連体形接続と終止形接続の使用状況

3.3　「ゴド」は、どのような形式の文となじむか

続いて、調査文［２］による調査の結果について述べる。この調査文は、「ゴド」がどのような形式の文とよくなじむのかを明らかにしようとするものである。まず「旅行先でとてもきれいな川を見たとします」と前置きした上で、次の［２］①～④のように「ゴド」を使用するか否かを尋ねた。

［２］①きれいな川だゴドー（連体修飾を伴う名詞文＋ゴド）

②きれいだゴドー（形容動詞一語文＋ゴド）

③川がきれいだゴドー（形容動詞述語文＋ゴド）

④きれいな川があるゴドー（動詞述語文＋ゴド）

調査の結果は、次の通りである。

（７）調査文［２］による調査の結果

・①で「ゴド」を使用する話者　…… 60 名（90.9%）

・②で「ゴド」を使用する話者　…… 54 名（81.8%）

・③で「ゴド」を使用する話者　…… 32 名（48.5%）

・④で「ゴド」を使用する話者　…… 20 名（30.3%）

①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文において、８～９割の話者が「ゴド」を使用し、この形式の文が「ゴド」とよくなじむものであることが分かる。一方、補語を持った③形容動詞述語文や④動詞述語文では、前者で５割弱、後者で３割弱の話者にしか「ゴド」の使用が認められない。特に④動詞述語文は、「ゴド」とはなじまない形式であることが伺える。

このような傾向に、世代による違いはないだろうか。以下に、調査文［２］による調査の結果を世代別にして示す。

（８）調査文［２］による調査の結果（高年層）

・①で「ゴド」を使用する話者　…… 20 名（高年層の 90.9%）

・②で「ゴド」を使用する話者　…… 20 名（高年層の 90.9%）

・③で「ゴド」を使用する話者　…… 12 名（高年層の 54.5%）

・④で「ゴド」を使用する話者　…… 10 名（高年層の 45.5%）

（９）調査文［２］による調査の結果（中年層）

・①で「ゴド」を使用する話者　…… 11 名（中年層の 78.6%）

・②で「ゴド」を使用する話者　…… 10 名（中年層の 71.4%）

・③で「ゴド」を使用する話者　……　7 名（中年層の 50.0%）

・④で「ゴド」を使用する話者　……　3 名（中年層の 21.4%）

（10）調査文［２］による調査の結果（若年層）

・①で「ゴド」を使用する話者　…… 11 名（若年層の 91.7%）

・②で「ゴド」を使用する話者　……　9 名（若年層の 75.0%）

・③で「ゴド」を使用する話者　……　5 名（若年層の 41.7%）

・④で「ゴド」を使用する話者　……　4 名（若年層の 33.3%）

(11) 調査文［2］による調査の結果（少年層）

・①で「ゴド」を使用する話者　…… 18名（少年層の100%）

・②で「ゴド」を使用する話者　…… 15名（少年層の83.3%）

・③で「ゴド」を使用する話者　……　8名（少年層の44.4%）

・④で「ゴド」を使用する話者　……　3名（少年層の16.7%）

このようにして見ると、（7）で見た傾向は、世代の差にかかわりなく、全世代において同様に認められることが分かる。この傾向は、次のように示すことができるだろう。

(12)「ゴド」となじむ文の形式

①連体修飾を伴う名詞文 ≧ ②形容動詞一語文 ＞ ③形容動詞述語文 ＞ ④動詞述語文

「＞」の左側が「ゴド」とよりなじむ文の形式である。高年層において①連体修飾を伴う名詞文と②形容動詞一語文とに同数の使用者があることを考慮して、①と②の間は「≧」とした。

では、なぜ「ゴド」は、世代を超えて、①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方、④動詞述語文とはなじまないのだろうか。

この問題を考えるに際して手掛かりになるのは、山田孝雄の提唱した「喚体と述体」の概念である。

まず「きれいな川！」のような①連体修飾を伴う名詞文とは、感動喚体の形式そのものである。喚体は、「主格と述格の区別がない、直感的一元性の、感情的な発表形式」（山田孝雄 1950、146-148ページより要約）であって、その一種である感動喚体は、まさしく感動表現にふさわしい（感動表現をこそ役割とする、と言うべきか）。また、「きれい！」のような②形容動詞一語文は、感動喚体の形式そのものではないけれども、喚体と同じく補語を持たないことによって、二元的な述体の文と距離を置いている。

一方、「川がきれい！」のような③形容動詞述語文となると、もはや主格補語を持ち、これは述体の文である。述体は、「主格と賓格の対立がある、二元性の、理性的な発表形式」（山田孝雄 1950、146-148ページより要約）であって、感動表現には必ずしもふさわしくない。これがさらに④「きれいな川がある！」となると、主格補語の他にも（たとえば「あそこに」などの）補語を持ちうる、いっそう述体らしい述体となる。

以上のことをまとめると、次のようになる。

(13)「ゴド」となじむ文の形式と、喚体らしさ・述体らしさ

①連体修飾を伴う名詞文 ≧ ②形容動詞一語文 ＞ ③形容動詞述語文 ＞ ④動詞述語文

喚体的 ←――――――――――――――――――――――――→ 述体的

（一元性・感情的）　　（二元性・理性的）

「ゴド」が①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方④動詞述語文となじまないのは、「ゴド」は、感動を表すに際して用いられる終助詞であって、したがって、感動表現にふさわしい形式の文（喚体的な文）とはよくなじむものの、その表現に必ずしもふさわしくない形式の文（述体的な文）とはなじまない、という事情によるものと理解されるだろう。

ところで、（8）～（11）で示したように、どのような形式の文が「ゴド」とよくなじむかについては、世代差が認められないのであった。このことは、感動表現にどのような形式の文が好まれるかについて世代差が認められない、と理解し直すことができる。

それでは、この点について、地域差はあるのだろうか。筆者は、2004年度に宮城県白石市方言の終助詞「ゴダ」（これは、気仙沼市方言の「ゴド」と同様、感動表現で用いられる終助詞である）について、調査を行なった。そこで「ゴダ」となじむ感動表現の形式を調査したところ、気仙沼市方言の「ゴド」の場合と同傾向の結果が得られた（玉懸元2012予定）。このような調査を各地域の方言において推し進めていけば、日本語において普遍的に好まれる（あるいは、好まれない）感動表現の形式が見出されそうである。が、これは、本稿が取り上げるべき問題の範囲を大きく超えてしまう。非常に興味深い問題として、指摘するにとどめておく。[注1]

4　まとめ

以上、本稿では、次のようなことを述べた。

ⓐ「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられるか

老若男女の別なく用いられるものである。

ⓑ「ゴド」は連体形と接続するか、終止形と接続するか

終止形接続を使用する話者が多数ではあるものの、連体形接続を使用する話者も全体の３～４割に上り、決して少数ではない。

この連体形接続の使用については、世代差が認められ、使用する話者は主として高年層（～中年層）であって、世代が若くなるにしたがって使用されなくなっている。そのより具体的な様相は、次のようである。

最高年層である話者（1940年以前に生まれた話者）においては、連体形接続と終止形接続とが凡そ同等の勢力を持っている。すなわち、この世代は、「ゴド」の接続の仕方が連体形接続（もともとの接続の仕方）から終止形接続（新しい接続の仕方）へと置き換わっていくプロセスにおける、ちょうど中間的な段階にある世代である。高年層（1941～1945年生まれの話者）および中年層の話者では、連体形接続も見受けられるけれども、終止形接続が主流となっている。若年層・少年層と世代が若くなると、連体形接続を使用する話者は、ほとんど見られない。すなわち、この世代は、終止形接続への置き換えが完了しようとする段階にある世代である。以上のことを図示すると、次のようになる（再掲）。

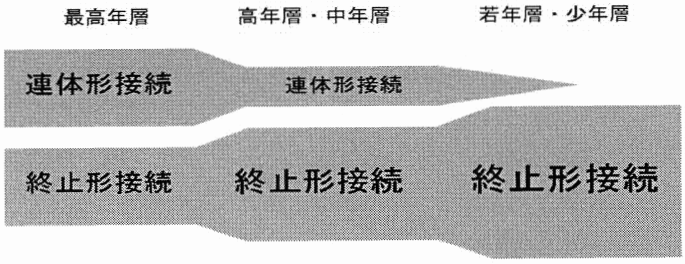

図６　各世代における、連体形接続と終止形接続の使用状況

ⓒ「ゴド」は、どのような形式の文となじむか

①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文において、８～９割の話者が「ゴド」を使用し、この形式の文が「ゴド」とよくなじむものであることが分かる。一方、補語を持った③形容動詞述語文や④動詞述語文では、前者で５割弱、後者で３割弱の話者にしか「ゴド」の使用が認められない。特に④動詞述語文は、「ゴド」とはなじまない形式であることが伺える。このような傾向は、世代の差にかかわりなく、全世代において同様に認められる。

この傾向は、文の喚体らしさ・述体らしさの反映と考えられる。すなわち、「ゴド」が①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方、④動詞述語文となじまないのは、「ゴド」は、感動を表すに際して用いられる終助詞であって、したがって、感動表現にふさわしい形式の文（喚体的な文）とはよくなじむものの、その表現に必ずしもふさわしくない形式の文（述体的な文）とはなじまない、という事情によるものと理解される。

以上のことをまとめて示すと、次のようになる（再掲）。

(13)「ゴド」となじむ文の形式と、喚体らしさ・述体らしさ

①連体修飾を伴う名詞文 ≧ ②形容動詞一語文 ＞ ③形容動詞述語文 ＞ ④動詞述語文

喚体的 ←――――――――――――――――――――――――→ 述体的

（一元性・感情的）　　（二元性・理性的）

注

注１　生越直樹（2002）は、日本語と朝鮮語とにおける、連体修飾を伴う名詞文（［Ａ＋Ｎ］構文）を対照し、朝鮮語の感動表現としては、連体修飾を伴う名詞文よりも「形容詞文の方がより自然な表現であることが多」いことを指摘している（生越直樹 2002、96 ページ）。このことは、連体修飾を伴う名詞文という形式が、言語を超えて感動表現にもっともふさわしい形式であるわけではない、ということを示している。このような研究成果も、感動表現の形式に関する言語（方言）間の対照研究に対する興味をかき立ててくれる。

文　献

生越直樹（2002）「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方―「きれいな花！」タイプの文を中心に―」生越直樹／編『対照言語学』東京大学出版会

玉懸　元（2012 予定）「終助詞『ゴダ』」小林隆／編『宮城県白石市方言の研究』東北大学国語学研究室

山田孝雄（1950）『日本文法学要論』角川書店（書肆心水より『山田国語学入門選書①日本文法学要論』として 2009 年に再刊）